

【講評文】8月11日（木） 11校目

「鬼と焼きそば」 加茂農林高校

新型コロナウイルスに奪われた高校生活の思い出を、目を背けてきた地域活性化という問題を通して取り戻そうと必死になる姿に、コロナ禍でも青春を諦めたくないという強い意志を感じ、多くの共感を集めた作品でした。コロナ感染者とむつみの本来の姿を両方も「鬼」と表現し、最終的には2つの「鬼」が協力して焼きそば屋台を成功させようとする場面では、コロナ終息後の未来に希望があることを示唆しているように感じたという意見が出されました。

キャストでは、総じてテンポが良く、かつ一人一人の発言がよく聞こえ、表情もよく見えたことで感情移入できました。特に「私」が一人で旗を振る場面では、悔しさや切なさ、悲しみや怒りが入り混じる感情を、そのゆがんだ表情から強く印象付けられたとの意見がありました。むつみと父の戦闘の際には、人間を演じていた時よりも動きに緩急があり、人ならざる者の生きる世界観を巧みに作り上げていたように感じます。

舞台美術では、地図やポスターなどの小道具が誇張して大きく制作されていたこと、移動の場面では装置を大きく動かすことで疾走感が感じ取れたことなど、場面設定が伝わりやすい工夫がなされていました。一部照明がキャストの顔に当たらず表情が隠れてしまっていたという意見もありましたが、「鬼」という現実ではありえない脅威が、鬼の姿を中心に照明の当たる範囲を絞ることで表現されていて、不穏かつ神秘的な雰囲気を感じられました。

衣装でも学生服にそこまで差がなかったことで、リアルな学校の様子を感じ取ることができました。異形の鬼の衣装や焼きそばを模した服装など、主要な人物以外にもキャラクターの個性を生かした外見を印象付け、観客を飽きさせない工夫が見られました。

ラストシーンについては講評担当者の間でも大きく解釈が分かれました。コロナが終わった後も地域の活力が不足しているという現状は変わらないことを訴えているのではないかという意見や、屋台のバックランプが点灯したまま回り続けていたところから劇中に生まれた人々の絆や地域協力は今後も続いていくと感じたという意見がありました。キャストの表情をしっかりと映し、登場人物の心情変化を観客に伝え、共感とともにコロナや地域の過疎化という社会問題への関心を高めていたように感じました。

加茂農林高校のみなさん、上演お疲れさまでした。

(文責 岐阜高校 2年のの 1年レン)